

女性学授業におけるセクシュアリティ概念

女性学の新しい方向——専修大学総合科目「性の諸相」を題材に——

広瀬裕子

I はじめに

専修大学における総合科目「性の諸相」の授業記録を題材に、大学における女性学教育およびその思想母胎であるフェミニズムの従来とは異なる方向を考える。同授業はあえてフェミニズムが中心的概念として使ってきたジェンダー概念でなくセクシュアリティ概念に焦点を当てることにより、女性学および女性学教育の新しい方向を模索している。

目次

I	はじめに	1
II	女性学におけるセクシュアリティ概念の位置づけ	2
1	女性学に関する授業の展開動向	2
2	いくつかの新しい問題	3
3	ジェンダー概念とセクシュアリティ概念	5
III	授業の試み	6
1	授業開設の概説	6
2	授業のディスカッションから	8
(1)	性—または女性、男性—を定義する	8
(2)	恋愛感情を定義する	10
(3)	なぜ異性愛なのか	11
(4)	相対化視角の取得	13
IV	終わりに	15
	英文 Abstract	17
	〈編集後記〉	18

II 女性学におけるセクシュアリティ概念の位置づけ

1 女性学に関する授業の展開動向

大学において、女性学関連講座の開設は日本に於いてもここ20年ほどの間に急速に広まっている。国立婦人教育会館が継続的に実施している全国調査「高等教育機関における女性学関連科目等の調査」によると、1983年度時点では開講大学数75、開講科目数94であったものが、1990年度には開講大学数251、開講科目数463に、1996年度¹⁾になると開講大学数351、開講科目数786となっている。

船橋邦子は、大阪女子大学において実施している女性学授業の視角を、「まずは女性の人権の視点に立って、セックス神話、母性神話、レイプ神話を解体することから始め、続いて買春、ポルノグラフィ、レイプ、セクシュアルハラスメントなどの女性への暴力の現状を認識できるようにする」²⁾ 方向に設定している。女性の人権、女性への暴力、女性への不当な差別に焦点を当てるこの方向は、女性学教育の一典型であり、現在でも主流をなしている。この文脈で使われるジェンダー概念は、一方的に女性に抑圧を強いるアンバランスな社会的性の枠組みといった限定的意味あいで見られることが多い。

一方金井淑子は、それとは異なり、「差別されるもの／差別するものの関係性も単純に女性／男性という構図でもとらえきれなくなっていること、むしろ男女いずれにとっても『ジェンダー』の縛りが個々人の生き難さの背景となっているという認識に至る女性学教育の内容をつくるというという問題意識から、結果として、男性学の視点を織り込んで、あるいはジェンダー研究をも取り込んだ女性学」³⁾ の方向を重視している。金井がこの一文を「女性学の周辺から」とタイトルに謳って発表するところに、現在の女性学教育のメインストリームが相対的に浮かび上がる。この金井の問題意識は小論においても共有するものである。

前出の「高等教育機関における女性学関連科目等の調査」結果を材料に、1996年度開講分の授業の中で、講座名、テーマ名からセクシュアリティを扱っていると思われるものをピックアップすると延べ14、5件程度確認できる。全786件中、割合で言うと2%弱で、セクシュアリティを扱う授業はごく少数であることがわかる。その内、小論が取り上げている専修大学の授業以外に、授業タイトルから恐らくセクシュアリティにもかなりの重心を置いていると思われるものは次の二つである。一つは、岡山大学の「性を考える Sex, gender, sexuality, intimacy, reproduction」⁴⁾、もう一つは関西大学の「〈性〉と〈生〉を考える ジェンダーとセクシュアリティ」である。⁵⁾ 後者は関連テキスト⁶⁾ が出版されており、それによると、社会科学的な問題意識を持ちながらも必ずしも女性のみを社会的な被抑圧者とするのではない姿勢が見てとれる。

それぞれ女性学教育の新しい試みと推察する。

セクシュアリティを社会科学的領域をも含めて扱う領域として、女性学のほかにセクソロジーがある。しかし時としてジェンダー概念が希薄なセクソロジーに対して、女性学、フェミニズムはそれに対する批判意識から社会におけるジェンダーバイアスを強調するということがあった。しかしこの関係は女性学にとっても建設的ではない。フェミニズムにおいてジェンダー概念は、女性を被抑圧者、被害者とする枠組みといわば同義で使用されたまま、硬直化する弊害をももたらしている。女性や性をめぐって認識される問題は多様化し、当事者の状態によっても一様ではなくなっている。先発的に認識されていた問題が解決しきらないままに新しい問題が登場し、同じ時空に質の異なる問題が幾重にも層を成して見られるのが現状である。バイアスを強調する伝統的なジェンダー観で把握できるのは、この中の一部ないしは一側面なのである。セクシュアリティの考察に当たっては、セクソロジーの成果に耳を傾けることも必要である。

2 いくつかの新しい問題

今までのフェミニズムの枠組みでは対応できない問題提起が出てきている。その多くはセクシュアリティをキーワードとしている。

まず、1990年代に入り、それまで性差別の一種の究極形態とみなされていた買売春を、そうではなく性というサービスを売買するサービス労働の一形態 Sex work であるとする見方が、日本をも含めて各国で紹介されるようになった。性産業に見られる様々な問題を、セックスワーカーの労働条件の改善問題として見る見方である。昨今の性産業の、強制売春と言う概念では把握しきれない側面に正面から光を当てる現実的な分析概念である。しかしながら言うまでもなくこの見方は、買売春を女性に対する性差別と見、倫理道徳的に許容できないとする旧来のフェミニズムの論理とは相入れない。旧来の方法は、今日でもなお残る強制売春に対処する有効性はあるものの、そこからはみ出す現在の状況を把握するには限界がある。性産業の需要を家父長的な女性の分断の意図として捉える従来の方法では、性産業が存在し続けている契機を理解し得ないだけでなく、女性側からの需要も既に市場を形成していることの分析に関してはなお無力なのである。

また、「ポルノグラフィ」告発や性の商品化批判も同様な問題状況にある。依然根強い傍若無人な悪意や失礼は引き続き問題にする必要はあるとしても、セクシュアリティを高揚させ充足させることを、そもそも正しい—正しくないという軸で理解するのは無理である。ある形態のセクシュアリティを社会的是非の観点で批判糾弾する行為は、一定の運動論という場面ではあり得るし、しなければならない場合もある。しかしそれはセクシュアリティの一般論の形成

とは別のことだと理解されなければならない。フェミニズムにあってはそれがしばしば混同されてきた。そこにおいて問題は二つある。第一は理論上の問題で、セクシュアリティを社会的是非の変数で見ると、その軸に収まらない喜怒哀楽を対象にできなくなる点である。元々「正しい」セクシュアリティの形があるのではなく、社会的文脈の中であるものが是とされ、非とされるのであって、この評価自体、歴史的特殊性を纏っていることが不明確になってしまう。第二はフェミニズムの自己認識の問題で、フェミニズムが自らが帯びている権力性に対して無自覚である点である。言説においても運動においても、既に政治的正しさとして一定の市民権を得ているフェミニズムは、望むと望まぬとに関わらず、正当性という権力を体現するものになり至っている。フェミニズムが「正しさ」を背景にして行う断罪行為は、反論のできない権力としてたち現れるのであり、ここにおいてフェミニズムを掲げる者は、文字どおりの被抑圧者、弱者に留まっておらず、被抑圧者、弱者であるが故の権力の行使者として機能している。とりわけ運動論の次元ではこのことに自覚的でなければならない。

さらに、性に関するダブルスタンダードを廃して対等な男女の関係を作ろうというたぐいのいわゆる平等論も、その限界が認識されなければならない。あたかもオールマイティの切り札であるかのように流通させられてきた平等論は、セクシュアリティに関しては男性がそれをプロミスキュラスに謳歌している一方で、女性には貞操を求めている形を問題にすることが出発点であった。しかしながら、これが女性にとってのオールマイティーであるためには、少なくとも女性がモノガマスな一対一的なセクシュアリティを持つということを前提としなければならない。文字どおりの一夫一婦婚的男女平等の提唱は、ことセクシュアリティに関しては、女も男も「平等に」ある種の喜怒哀楽を自粛抑圧して、生きにくさを共通に堪えようということではかないのであって、セクシュアリティの謳歌、充足という関心軸とは異なった問題構成になっているのである。フェミニズムにあっては、このことにほとんど無自覚であった。

加えて、トランスセックス、トランスジェンダーの社会的認知方法がテーマとして昨今浮上して来たことは、フェミニズムが無媒介に前提としていた女性という存在を問う契機となっている。アイデンティティや喜怒哀楽において、女性というものは男性というものの対としてあるということにフェミニズムは疑問を持たなかった。ある意味では初発にはレズビアンがそれを問うたかもしれない。が、人間をア priori に女と男の二概念で見るとということに関しては変わりがない。この問いは何を以て女というか、誰を女というかという女性の定義の問題でもあり、いってみればフェミニズムの根幹にある問いのはずである。社会的性差 Gender の相対性、人為性は、生物学的性差 Sex をある種「絶対的」性差であるように想定して切り離す戦略を通して強調されてきた。しかし社会が設定したジェンダーの形に異議を唱える問題次元とは異なり、そもそも自分が女であるということを納得しない事態、セクシュアリティにおける

アイデンティティの多様性、性自認の多様性の問題は、この構図では解くことができない。女が女である根拠、男が男である根拠を問わないですむとすることそのものが、一つの立場の表明になってきていることに自覚的でなければならないのである。

これら、ジェンダーのアンバランスとは射程を異にしたセクシュアリティの諸問題は、今まで、ともするとフェミニズムとは無縁のテーマ、あるいはフェミニズムの「成果」に無理解な社会認識として済まされることすらあった。しかしながら、出自としてリブ Women's Liberationの系譜を引くフェミニズムであってみれば、性の問題を単にジェンダーという制度枠で立論するだけでなく、その制度枠と欲情するエネルギーとの関係というモチーフに於いて捉える契機をも内包しているはずである。性の抑圧を女性の抑圧、またその表裏一体のものとしての男性の抑圧と把握するのは位相を異にした関心の持ち方が必要とされているのである。昨今のセクシュアリティをキーワードにした事柄は、そういう意味でフェミニズムの出自を検証する材料でもある。

3 ジェンダー概念とセクシュアリティ概念

女性学におけるセクシュアリティ概念の導入は、したがって女性学の問題関心をシフトさせる契機になる。女性を男性権力社会における被抑圧者、被害者であるとする枠組みを使って効果的に認識できる問題群から、それ以外の諸問題へのシフトである。男女が平等である場でお存在する「女であるが故の生きにくさ」、望ましき男女異性愛関係の創出と維持という方向では解決しない「女であるが故の生きにくさ」の問題である。もちろん「男」であるが故の生きにくさと置き換えられる場合もある。社会の一定の文脈の中でしかセクシュアリティを充足させる方途を持たないわれわれの宿命、女と男の二性が第一義的にセクシュアリティにおいて指向しあっているとされる基準、人を女か男かのいずれかにカテゴライズする人為性、社会がその二つの性で構成されているということ自体の人為性に関わる問題群へのシフトである。

ジェンダー概念を駆使して女性の被抑圧性を描いてきたフェミニズムにとって、セクシュアリティ問題は二義的であった。あるいは、セクシュアリティ問題が扱われるときは、女性に対する抑圧的権力問題に翻訳し直して論ぜられた。そして性に関する欲望、感情面全般を、男性の「家父長的」な女性観や性的な興味関心や感情と同義とする手法が長らくとられてきた。性の商品化批判、ポルノグラフィ批判はその典型例である。

性欲や性的高揚の感情は当然ながら男性に占有される家父長的なものだけではない。しかしフェミニズムはそれ以外のものを論じる語彙を持たないで来た。男性的ファクターが排除されたレズビアン関係を例外的な言説展開の場にしたり、異性関係では、ポルノグラフィと峻別する意図でエロティカという用語を使う試みなどが多少あった程度である。

その後若干の時間の経過とともに、セクシュアリティという言葉の使用はフェミニズムの中で以前ほど希有ではなくなってきた。むしろ1990年代の後半に至ると、一種のブームのように使われ始めてもいる。⁷⁾今のところセクシュアリティ問題というと、ジェンダー枠組みに翻訳された女のセクシュアリティの抑圧というトピック⁸⁾として話題にされていることが多い。ここに留まる限りにおいては、従来のフェミニズムに質的变化は及ばさない。しかしながら、セクシュアリティは必ずしも社会的正義の理論と整合するとは限らない不条理をも含有する概念であり、この概念の導入は従来のフェミニズムの言説の枠組みを修正ないしは放棄することを不可欠とするはずのものなのである。

III 授業の試み

1 授業開設の概説

本総合科目「性の諸相」は、専らセクシュアリティをキーワードとする諸問題を題材としている。⁹⁾本授業の1994年度から1996年度分は、ほとんどがテープに録音され文字に起こされている。本稿では、その内1996年度の導入部分に当たる「好きになるということとアイデンティティ」および「同性愛と異性愛」のディスカッションの一部を題材にしながら、セクシュアリティ概念に焦点を当てた女性学教育の関心の持ち方と問題の射程を紹介したいと思う。

「性の諸相」と題する本授業は、専修大学の教養科目の一つとして総合科目という設置形態でここ数年展開されている。当初、この授業は必ずしもセクシュアリティに焦点を当てていたわけではない。「男と女」と題して、ジェンダー考察に重きを置いていた数年の時期があった。その後次第にテーマをセクシュアリティに移していく。それは、性を抑圧-被抑圧関係で捉える方法では問題の一部しか説明できないという担当者側の問題関心と、実際にその種の手法ではかなり工夫しなければ受講生の大半を占める男子学生に性をめぐる状況を主体的に考察する場を提供できないという経験の相乗の結果である。1993年度から大卒で現在の授業構成になっている。

授業中の討論を重視する関係上、討論時間を確保する目的で半期2展開、つまり、2コマ続き180分の授業を半期展開という形で行っている。広瀬が全体をコーディネートする中で、テーマによって必要且つ有効だと思われる授業に学外からゲストを招いている。この180分という時間は、とりわけゲストを招いたときの、ゲストとの議論を深めるには有効である。

全体の授業計画をテーマとゲストで示すと次のようになる。担当が広瀬となっているものは、ゲストを配さない授業である。

好きになるということとアイデンティティ 1、2	—————	広瀬 裕子
同性愛と異性愛	————— 動くゲイとレズビアンの会	風間 孝
セクシュアリティの自認、享受、表現 1、2	—————	広瀬 裕子
エイズをめぐってセクシュアリティを考える—第10回エイズ国際会議PWA代表		大石 敏寛
社会問題としてのセクシュアリティ 1、2	—————	広瀬 裕子
性と差別の問題	————— 働くことと性差別を考える三多摩の会	丹羽 雅代
社会制度と性1、2	—————	広瀬 裕子
結婚と買売春	————— フリーライター	掛札 悠子
エロス論の試み、まとめ	—————	広瀬 裕子

1996年度の受講生は、次のような構成である。

全登録者数134（女子49、男子85）

学部別

経済	32（内女子4）
法	16（内女子4）
経営	33（内女子14）
商	17（内女子3）
文	36（内女子24）

授業が基本的コンセプトとする視座は、ヘテロセクシュアリティ自体の相対性とセクシュアリティにおける加害—被害の構図の意図性と社会性である。受講生に配布するシラバスには、次のような文章で授業の性格、方針を示している。

「われわれは、通常自分が女である（／ない）、自分が男である（／ない）という形で自分の性を認識している。そして女であったり男であったりすることが余りに身近なことなので、あたかもその意味することが自明のことであるかのように思うことも、無くはない。

しかし『この世の中は“男と女”で組み立てられている』という、“わかりきった”ようなことを改めて見つめなおしてみると、性をめぐる様相は多様な側面を持っていることを思い知らされる。自分自身のアイデンティティの持ちかたや、人間関係の織りなす喜怒哀楽、あるいはそもそも“男と女”の二つの性を措定することの意味、またその措定の上に蓄積された文化や制度…。しかも、その具体的な現われかたや、認識のされかたは、時代と状況が変われば様々に変わってくる。

授業では、われわれが当たり前だと思っていた『性』、言い換えれば、近代理性が想定した『性』の枠組みを相対化することをも選択肢としながら、これらについて考えていきたい。
略」

2 授業のディスカッションから

1996年度は、以下のテーマでのディスカッションを授業全体の導入とした。

性の定義 または女と男の定義

好きになると言うこと 恋愛感情はどういう感情か

異性を恋愛対象にすると言うことは？ 根拠の有無

このディスカッションのねらいは、近代社会における異性愛ないしは異性愛という感情の相対性を浮き彫りにすることと、性、セクシュアリティといわれるもののきわめて社会的人為的側面の認識である。

まずは「好きになると言うこと」はどのような感情であるかをテーマにディスカッションを始めるが、必ず途中で異性を恋愛の対象とすることが話題になるので、その時点で女と男の定義を確認し、更に異性を恋愛の対象とすることがどういうことであるのか、何かしら特別な意味を持つのかどうかと言う点を確認する作業をすることになる。

(1) 性—または女性、男性—を定義する

性、または女性と男性の定義をするに当たって、性はいくつあるのかという問いをとっかかりとする場合もある。毎年最も多数派をしめるのが人間の性には女性と男性の二つがあるというものである。その他、三つ、四つ、無数、人間の数だけと言った形で答えが出て来る年もある。

例えば、性を二つとする場合の両者の違いとして次のようなものが出てくる。

A ; 生まれたときから男か女かって。分かれてるじゃないですか、性別で。いやだから、生まれたときから男だって言われてきたから……。そう思って生きてきたからやっぱ自分と違うもんだと思っちゃう。

B ; 男の人はゴツゴツしてて、髭が生えていたり、骨とかも太いし、女の人は丸みがあってラインも滑らか。大人の女の人だったら胸があったり……。

前者は逆に言えば、性別設定は特に根拠があるわけではないと言うことを言っていることでもあり、また後者に関してはかなりの個体差があり、必ずしも男女を分ける指標にならないことは言うまでもない。服装や顔立ちだけでは判断できないユニセックスのファッションしかり、胸の大きい男の力士を女性とは言わないことなど容易に想像しうる例である。続いて、生殖面に関する特徴が出される。以下のようなものである。

C ; 子供が産めるかどうか。

D ; チンチンがついてるかどうかの違いだと思います。

あるいはまた、染色体に関しても必ず言及される。

E ; 体がゴツゴツしているとかどうとかっていうのは、生き物として雄か雌かってぐらいで、最終的には染色体とかそういう調べてみれば雄か雌かは分かると思う。XとかYとか。

当然ながら、子供を産めない「女性」、ペニスが識別できない「男性」、生物学上の女性的特徴と男性的特徴を合わせ持つ半陰陽 Intersex 等々を想起すればこれらの定義が十分なものでないことは分かる。少なくとも人間社会を性で二分できるとする定義としては大雑把すぎる。ディスカッションの中でも外見、性格、立ち居振る舞い、身体的特徴等々どれをとっても個体差、例外が必ず指摘され、男女を区分する決定的な指標は出てこない。

半陰陽 Intersex についてだけでなく、染色体にしても必ずしもXX、XYの二種類ではないことと、発生時のホルモン作用によって性器、生殖器の形態も変わる等々は、少なくとも授業を行う側からの情報としてもここでつけ加える必要はある。⁹⁾

社会の変化に対応して流動するジェンダーに対し、セックスは確とした区分を持つかのようになっているが、実はそうではないと言うことをここでは確認したい。二分は従って2種類あるから二分するのではなく、二分するために多様なものを振り分ける人為的な行為であることの確認である。ある程度の少数者を「例外」、「異常」として排除する方法を採るなら、確かに性を男女に二分する基準はいくつもあり得る。しかしフェミニズムにおいてはそのような方法を採るわけにはいかない。なぜなら近代社会が正規の構成員の範疇から女性を排除してきたことに対する疑問から始まったのがフェミニズムであり、「周辺的存在」とされた女性も社会の中のまっとうな主語となるべきであるというのがその基本的モチーフだったからである。ある種の人たちが例外とされるならば、なぜそうされるのかをこそ問うのがフェミニズムの思考形態であるはずだからである。社会全体を覆う性別役割分業に異議を唱えたのも、少数派で

ある女性同性愛者の抱える二重の社会的抑圧の問題に目を向けたのも、それまで大目に見られてきた社会「慣習」に不快感を表明してセクシュアル・ハラスメント概念を創出したのも、フェミニズムの依拠するところが多数-少数の多数の側、正統-異端の正統の側ではなかったからに他ならない。

(2) 恋愛感情を定義する

恋愛は、性を軸にして喜怒哀楽する感情の代表的なものである。好きになるというのはいったいどういう感情であるのか。

恋愛という感情は、近代社会にあっては全ての人に開かれ、アイデンティティの拠り所として追求されてきた。同時にセクシュアリティを充足させる正当な手法だとも見なされている。皆婚制を採り婚姻とセットで広まったことによって、恋愛は生殖の場を確保するための前段階という位置づけを与えられている。従ってここには男女が恋愛の第一義的当事者となる。あまねく人を対象に、男女=恋愛=婚姻=生殖=性別役割分業という項目の連関を適用し、その中にそれぞれを配置するのが近代社会の構造的特徴でもある。

ポピュラーな感情であるはずの恋愛感情は、しかし言語によって定義することは容易なことではない。参加者は例えば次のような言葉で表現する。

F; 嬉しくなること。

G; 一緒にいると楽しかったり、一緒にいたいという気持ち。

H; その場合にもよるんですけど、私の場合は、常に嬉しい訳でなくて時によってはこんな恋愛しなければよかったって思うほど辛い時もあるし、どっちかっていうと、失いたくないっていうか、その人と、一緒にいなくてもいいから、その人に嫌われたくないっていうか…どっちかという、その人に認めてもらいたい。

I; 自分のことも知ってほしいし、相手のことも知りたい。

J; 自然にその人のことを考えてる。

K; 日常生活の中で、突然泣いてみたりだとか突然笑ったりとか急に楽しくなったりだとか、感情が高ぶる。

L女; 相手が、他の女の子と仲良く話していたりすると知らず知らずのうちにむかついている。

異性を対象にした恋愛感情に異性愛という名称を与えるまでは、授業での発言はほとんど全てが異性愛を前提としているとみて良い。そしてこの事に発言者自身も無自覚である。ディスカッションの始めからそれ以外のセクシュアリティの形態をも念頭に置いている者は皆無では

ないがごく少数である。従ってこれら普遍的な言い方も、ほとんどの場合、少なくとも異性を対象にした感情として言われている。発言者に、その発言内容の条件を満たせば相手は老若男女問わない定義であるのかを確認すると、例外無く対象を限定して発言を修正する。

中には恋愛を端的に異性間の感情と想定して次のように説明する者も出る。

M；恋愛感情の好きっていうのは、なんていうかそんな特別なものではなくて、いわば相手のカリスマ的なものについていった結果、それが男と女だったら恋愛しようかみたいな、それぐらいなものじゃないかと。

また、次のように恋愛を性行為とセットのものとして理解する意見も必ず出る。

N；友達として好きっていうのと恋愛として好きっていうのって区別できないと思うんですよ。それを区別できるのは、好きになった相手が性的対象になるかならないかっていうことだと思います。やりたいってこと。(一同笑) 性的な関係を持ちたいっていう感情。

この性的な関係として参加者たちに想定されているのは、従ってペニスをヴァギナに挿入するタイプのインターコースである。

(3) なぜ異性愛なのか

なぜ恋愛の対象は異性なのか、なぜ異性に恋愛感情を抱くのかというのが次の問である。しかし、異性愛を当然のこととしている多くの受講者にとっては、そもそもこの問が問として立つことに馴染んでいない。

必ず言及される定番の反応は次のようなものである。

O；で、やっぱり人間ですから、生物学的にも、子孫を残して行かなくてはならない訳ですから、やっぱりそういうことも、好きになる対象を選ぶときに影響を及ぼすと思います。相手の性別を言うよりも、まず第一に選択として現れるのは、相手が自分と違う性であって、それで自分の子孫が残せるか残せないかっていうのがまず根底にあって、その上に好きになる対象が構築されると思うんです。(略)生存本能ですか。本能的に。

異性愛を種の保存、生殖行為との関係で根拠づけるこの種の解釈に関しては、授業では、次のような「ゲーム」を試してみる。

二人の人間A、Bを想定する。Aは、外見や立ち居振る舞い、ものの考え方等が自分が思い描いている「理想的でセクシー」な男性で、しかし服を脱ぐとヴァギナを持ち、子宮を有する人で、Bは逆に、外見や振る舞いが「理想的でセクシー」な女性で、しかし服を脱ぐとペニスを持ち、精巣を有する人である。そのどちらに自分は恋愛感情を抱くかというものである。もちろん初対面で服を脱いだり身体構造を開示することは滅多にないので、その人の身体を知るのには時間的には後か、あるいは最後まで知らぬままと言うこともあり得る。もしも、「本能」的に生殖的観点から恋愛対象を選んでいるのなら、外見や服装などに「惑わされず」に、身体的な特徴の方を「本能的に察知して」対象を選ぶはずであろう、というのがこのゲームの趣旨である。

参加者はほとんど例外なく、隠された身体ではなく外見等で相手を選ぶと思うという。更に、事態を知ったあとどうするか。この点に関しては意見は例年二手に分かれる。身体が自分の想像していたものと違った時点で恋愛感情がなくなるという者と、その身体をも含めてやはり自分はその人を恋愛対象とし続けるだろうと言う者の二つである。正確に言えば、即答できないと言うものも相当数出てくるので立場としては三つである。ここでのポイントは、引き続き恋愛の対象とし続けるだろうと言う者が必ず毎回それもある程度の人数いることである。生殖は恋愛過程に付随することはあっても、必ずしも恋愛相手を選択する根拠であるわけではないようなのである。

P男；別に、セックスするときになれば、ちょっと厳しいところもあるのかもしれないんだけど、けど別に一緒にいて自分の理想の女性なんでしょ、みかけとか。だったら一緒にいても楽しいだろうし、肩に手まわして、キスくらいはへっちらだと思うんで、関係ないっていうか。

Q女；私だったら外見的に男である方の人間を好きになると思う。それは私にとって、脱いだときの男性性器っていうのは、別にセックスするうえであまり関係のないことで、男性性器と女性性器を結合させることが私にとってのセックスっていうのではないので。それは、本能で言った生殖の方を重視しているわけじゃなくて、相手とセックスすることによって共有できる時間とか、感覚っていうのを重視しているので、相手に男性性器がついていなくても、関係ない。

これらの意見は、生殖という目的ばかりでなく異性間のインターコースという形態の性行為も恋愛の必要条件ではないということの意味している。日常生活の中にも恋愛感情と性交、生殖が連動しない事例を見つけることはた易い。不妊のカップルや身体的障害により性交が不可

能なカップルの間にあって恋愛は可能であるし、避妊¹⁾をして性交を楽しむことはきわめて日常的であって、子どもを産むことを選ばないカップルも珍しくない。

(4) 相対化視角の取得

異性愛関係を、更に事実として相対化する恋愛の諸形態もある。同性愛は其中最も認知度の高いものである。授業では、同性愛者をゲストに招いて話を聞き、また議論をする。

授業開始当初、同性愛に対して誤解や偏見を持つ参加者は多い。メディアに流通しているお笑いネタのイメージを持っていたり、異性装やトランスジェンダー、トランスセクシュアル、職業としてのニューハーフ等々と捉え違いをしているがゆえの誤解であったり、得られる情報が少ないことによる誤解であったりする。しかし、この種の誤解偏見は、授業の経験からして容易に消える。

授業後の参加者の感想の中心的なトーンは次のようなものである。概して授業に関連して書くレポートは、多少ゲストやコーディネーターの「意図」を意識して時にこびた表現を伴うもので、ここに於いてもそれは例外ではない。が、その点は問わないことにする。

- ・もっとなよなよしている男の人たちが来るのかと思っていたが、全然そんなことはなく、今までにあった先入観はやっぱり、マスコミに作られたものだったなあと考えた。
- ・自分は homosexual な人たちはもっと女っぽく振る舞ったりする事をしないのかと思っていたが、全く普通のようなことに気づいた。

誤解、偏見に自覚的になった段階で初めて、セクシュアリティの問題として、あるいは社会的差別の問題として、同性愛に関する議論が可能になる。

先にも見たように異性愛の正当性を論拠づけて提示することが容易でないということは、同性愛が社会的に異端視されていることの合理性を展開することもまた容易ではないということである。自分は気がついたら同性が好きだったという言い方で説明される同性愛は、自分は気がついたら異性が好きだったという事と同じ位相にあり、従って恋愛の形態という点で見た場合に同性愛と異性愛はイーブンなものとして理解されるようである。例えば次のような感想を見ることができる。

- ・自分ら男は女性を見てセックスをしたいという欲望を持つが、しかし毎日セックスばかりしているわけではない。Homosexual の人はその女性が男性であるだけのことだと少し理解を示せるようになった。

・「自分は異性を好きになるって言うことやその気持ちが理解できない」と言うことをおっしゃった(同性愛者の)方がいて何か妙に納得してしまった。一瞬自分の中の少し偏見を持っていた部分が吹っ飛んだ気がした。

また、異性愛と同性愛にイーブンなイメージを持つ段階で、世間の常識と言われるものや、固定観念に人々の思考や認識が大きく影響されていることを指摘する意見も出てくる。

・話の中ででてきた「同性愛者が悪いのではなく、偏見的な見方をする方が悪い」と言われたときに、本当にそうだと自然に思えた。そのときから“男は女を好きになる”という一般的な考え方は何か変にこだわりすぎておかしいと思った。

・今回話を聞いて固定観念を押しつけられることはとても恐ろしいことだと感じた。本来人間は様々であり、何をしても好きになるのも本人の自由であるのに、ある種の固定観念が押しつけられ、それが皆に定着してしまうと、一つの見方しかできなくなってしまう。

この段階で、同性愛に対する認識態度を大きく変える者、なお否定的見解を採る者と、立場は多様になる。しかし少なくとも参加者は、異性愛文化を相対化する視角をも選択肢として得ている点では共通している。男女で組み立てられた性別役割分業の人為性は言うまでもなく、性の定義の人為性、恋愛のイデオロギー性、恋愛結婚の歴史性をも射程に入れた上で初めて、現在の性に関する諸問題に取り組む基本的足場ができる。

異性愛と同性愛の対比は、異性愛の相対化のためには有効な手法であるのだが、注意しなければならないのは、ここで異性愛－同性愛の二元論的が旧来の異性愛一元主義に取って代わってしまう場合である。異性愛に同性愛を加えて、人間のセクシュアリティの形にはこの二種類があるのだといって納得して終わってしまうことがあるのである。そればかりでなくごく希に、同性愛者に対する社会的差別の不当性が、同性愛の正当性と異性愛の権力的不当性と言った形で反転させられることもない訳ではない。しかし言うまでもなく、どちらもこの授業が意図するところではない。異性愛と同性愛は人間を男女の二つの性に分類して自分のセクシュアリティを高揚させるという限りにおいて同類のものであるし、それ以外のセクシュアリティに対して容易に社会的正統性を主張しがちな点に関しても同様である。上に紹介した感想の中で、同性愛者が「普通」であったので偏見を反省するといった受け取り方なども、そういう意味では要注意なのである。

異性愛の相対化は、セクシュアリティの相対化視角を獲得して、性、セクシュアリティに関わる問題状況に対処するための柔軟なアプローチを可能にするために行うのであって、異性愛

に代わる優位なセクシュアリティ群を「発見」するために行うのではない。それに代わる「理想状況」を想定したとしても、それに拘束されて、はたまた新たな権力の効果に安住してしまっ
ては本末転倒なのである。

IV 終わりに

セクシュアリティ概念の導入は、硬直しがちな旧来のフェミニズムのとりわけ運動論の視点を柔軟化しうる可能性を持つ。男の抑圧と女の被抑圧という枠組みで社会を切り取る方法の有効性の度合い、女と男の平等を志向する戦略の適否を不断に検証することをこれは不可欠にする。女性学、女性学教育は、その実施自体がフェミニズムの一環でありその動向に大きく影響される一面を持つと同時に、フェミニズムの理論的指針を提示する役割を担う関係にもある。

注)

- 1) 1996年度調査報告はインターネット版。国立婦人教育会館ホームページ参照。
 - 2) 「専門教育科目としての女性学 大阪女子大学の場合」萩原弘子と共著、『女性学』日本女性学会、1998、Vol.6
 - 3) 「女性学の『周辺』からの『女性学』再考」『女性学』日本女性学会、1998、Vol.6
 - 4) 正保正恵担当
 - 5) 石元清英担当
 - 6) 『ジェンダーとセクシュアリティ』嵯峨野書院、1996
 - 7) 『女性学教育／学習ハンドブック 新版』(国立婦人教育会館 女性学・ジェンダー研究会、1999)も、女性学教育のコアとして「性別役割分業の見直し」、「男女像と家庭像の見直し」と並んで「セクシュアリティ神話の打破」の三つを挙げている。
 - 8) 例えばレイプ、職場の差別問題としてのセクシュアルハラスメント、ドメスティックバイオレンス、従軍慰安婦問題など。
 - 9) 1996年度には含まれていないが、現在では授業の定番テーマとして「セックスワークという問題提起」「トランスセクシュアル・トランスジェンダー」が入っている。ゲストスピーカーは前者が桃河モモコ、後者が麻姑仙女である。
 - 10) たとえばPESFIS日本半陰陽者協会を主宰する橋本秀雄は、人間の性を「先天的四つの性」「後天的五つの性」として次の9つの性をあげている。『男でも女でもない性』青弓社、1998
- 1 性染色体の構成

- 2 性腺の構成
 - 3 内部生殖器の形態
 - 4 外部生殖器の形態
 - 5 誕生したとき医者が決定した性
 - 6 戸籍の性
 - 7 二次性徴期
 - 8 性的自認
 - 9 性対象
- 11) 近代を社会史的に見た場合の避妊の役割、すなわち単に近代社会に相応しい人口構造を用意しただけでなく、人々に近代的な心性を醸成したことは、近代社会の成立が避妊の日常生活への導入と密接不可分のものとしてあることを知るために提供しなければならない情報である。広瀬裕子「避妊とセクシュアリティの一側面」『人文学年報』第23号 専修大学人文科学研究所、1993参照

本稿執筆にあたり、平成8年度専修大学研究助成を受けた。

A Proposal for Women's Studies Education

- Introducing an university lecture based on sexuality -

HIROKO HIROSE

This paper proposes a new direction for the Women's Studies program by introducing a feminism-oriented lecture titled 'Phases of Sexuality' being given to undergraduate students at Senshu University in Tokyo.

What prompts this course of lectures are newly rising suggestive questions, which have been, and are, challenging the traditional feminist view. The questions of transgenderism and transsexualism, as well as that of sex workers' working conditions, are indispensable. These questions have emerged before traditional problems are solved. The key concept which highlights and illustrates them is 'sexuality'.

Traditional feminism has been employing notions of male domination together with men-women sexual 'dualism' when gender and sexuality problems are examined. Solutions therefore tend to be directed towards either an equal gender relationship or a satisfactory relationship between two sexes. This way should still be effective for some scenes while the new types of questions lie beyond this.

Feminism preferably defines sexualities in the framework of right-wrong or good-bad aspect. The effort to accuse pornography and sex in the market place, defining them as 'bad', is a typical case. This means should not be understood as a general interpretation of sexuality but as a strategic method for political change. What has to be realised is the fact that sexuality does not fit into and work in the dimension of right-wrong aspect. We only define some forms of this as right and others as wrong. The criteria which have been employed by the traditional feminism is one way of definition.

Topics well understood with the concept of sexuality should widen the aspect of Women's Studies to cover such issues of uncertain identity of being a woman or a man as well as toughness even under equal relationships.

The table of contents is as follows,

I Introduction

II The aspect of sexuality in Women's Studies

1 The trend of organising Women's Studies courses for university education in

Japan

2 Suggestive new questions

3 'Gender' and /vs. 'Sexuality'

III The lecture

1 Outline of the lecture design

2 Some discussions held in the lecture

(1) Defining Sex, or Women and Men

(2) Defining Romantic Love emotion

(3) Unsuccessful proving of heterosexuality

(4) Role of relativistic understanding

IV Conclusion

<編集後記>

従来、馴染んできたジェンダー概念、フェミニズム、の意味、あらたな女性学の方向、セクシャリティ概念、興味深く読ませていただきました。また、授業における学生の討論と感想に見られる、学生の直接性、柔軟性（意識改革における若干の安易さも含め）には驚きと羨ましさを感じた次第です。

それにしても、ここで扱われた問題に関する自らの認識不足と、問題を提示されたうえでもなお存続する自らの「意識」のずれはどこに起因するのでしょうか。

(KH)

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

(発行者) 古川 純

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話 (03)3404-2561
